

人的環境としての保育者の役割

— 現職保育者自身の視点で —

Roles of Childcare Workers as a Human Environment:
From the Perspective of Childcare Workers in Active Service

佐藤 有香
SATO, Yuka

Abstract

Roles played by childcare workers as a part of the human environment were examined from the perspective of childcare workers in active service. Participants were in-service childcare workers (N=55). They were requested to indicate the role that they considered to be the most important among the four types of roles described in the “Guidelines for Kindergarten Education (2008).” The results indicated that childcare workers considered their role of providing a psychological base for children as their most important role, followed by their role as a person that understand children well, as a co-worker and sympathizer, and as a model for children’s admiration, in that order. Furthermore, they were asked to use free description method and indicate what they themselves considered to be important in their roles as childcare workers. Most description expressed that they considered their role as a psychological base for children as their most important role, followed by their role as a person that understand children well, and as a co-worker and sympathizer, in that order. It is concluded that in-service childcare workers regard their role of caring for emotional and mental needs of children as a part of the human environment of early childhood education and as important.

キーワード：保育者、人的環境、役割、自由記述

I 問題と目的

待機児童の問題、貧困家庭の増加等子どもを取り巻く環境が急速に変化する中、教育に携わる教員に対し、その資質能力の向上が急務とされている。例えば、文部科学省は、『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～』という答申（文部科学省，2015）を出している。そこでは、これまで以上に教員一人一人に対して、高度な専門性や自ら研鑽を重ね、自身の資質能力の向上を求めている。

この流れは幼児教育、保育の世界も同様であり、保育者（本稿では、幼稚園教諭・保育士・保育教諭をさす）に対する資質向上や更なる専門性の獲得が望まれている。文部科学省による『幼稚園教員の資質向上について - 自ら学ぶ幼稚園教員のため』（2002）では、幼稚園教員に求められる専門性を次のように示している。具体的には、

幼児理解・総合的に指導する力、具体的に保育を構想する力、実践力、特別な教育的配慮を要する幼児に対応する力、保護者及び地域社会との関係を構築する力等を専門性としてあげ、幼稚園教員にこれらの力量を求めている。

また、同じく保育士、保育教諭に対しても、対人援助職としての専門性獲得や資質能力の向上を求めている。『保育所保育指針』（厚生労働省，2008）では、「保育所は、質の高い保育を展開するため、絶えず、一人一人の職員について資質向上及び職員全体の専門性の向上を努めなければならない」と記し、看護師、調理員等を含めた保育に携わる全ての職員に対し、質の向上を迫っている。子育てで家庭の孤立、養育力の低下等、保育所やこども園をめぐる環境の変化を背景に、施設の役割や機能が多様化、拡大する中、保育者の更なる専門性獲得は危急の課題である。

保育の営みの基本は、「環境を通して行う教育」とされている。これは小学校以降の教科教育とは異なり、園生活全てが学びの場であり、保育室や園庭、保育者や周囲

の子ども等、周囲の身近な環境に対し、直接的な関わりを通して総合的に行われるものである。しかし、この「環境を通して行う教育」は、ただ身近な環境がそこに存在するだけでは、子どもとの相互関係が成立し、成長へとつながるものではない。そこには、保育者の存在が不可欠である。

保育において、人的環境としての保育者の重要性は疑う余地はないだろう。園生活では、「保育者が教育内容に基づいて計画的に環境をつくり出し、その環境にかかわって幼児が主体性を十分に発揮し展開する生活を通して、望ましい方向に幼児の発達を促すこと」が重要とされている(文部科学省, 2010)。例えば、諏訪(2004)によると「保育の仕事は、人=保育者によって成り立つ」と述べ、保育者の存在の重要性を指摘している。保育者は乳幼児の心性や生活の仕方の特性を十分理解した上で、園生活や活動を展開していくことが求められる。

では、このような園生活を実現するために、保育者はどのような役割を担うのだろうか。この保育者の役割については、現在のところ『幼稚園教育要領解説』(文部科学省, 2008)のみで、保育者の役割について言及している。よって本研究では、この『幼稚園教育要領解説』で記されている教師の役割に焦点をあて検討していく。具体的な役割としては、以下の点をあげている。

1点目は、幼児の活動の理解者としての役割がある。これは、保育の基点とされ、一人一人の幼児が何に興味・関心を持っているのか、どのような心情なのかを捉えていくことであり、発達に必要な経験を適切に得るために必須とされる。この理解を進める際には、過去や現在の経験、集団や家庭での様子等を重ね合わせ総合的に捉えていくことが重要である。

2点目が幼児の共同作業・共鳴者としての役割である。保育者は、幼児に必要な環境や活動を提供するだけでなく、保育者自身が幼児と同じ目線に立ち、活動に参加し、共感していくことで、より深く幼児を理解することができる。また、幼児は保育者と共に活動に参加する楽しさから、より主体的な活動への参加へとつながっていくのである。

3点目は、憧れを形成するモデルとしての役割である。幼児にとって、人的環境としての保育者の影響力は非常に大きい。幼児は日々の園生活の中で、保育者の言動や子どもとの関わりをモデルに多くのことを習得していく。物事の善悪や道徳性、社会性を培う上で、保育者が一つのモデルとして大きな役割を果たし、そして、幼児は保育者の様々な行動や姿に対して、大きな憧れを抱いていくようになる。したがって、保育者自身は常に子どもからの視線や自身の言動の影響力を自覚し、子どもとの関わりを考えていかなければいけない。

4点目は、幼児の精神的安定のためのよりどころの役割である。子どもにとって園生活は、家庭を離れ最初に経験する社会生活であり、これまでの家庭環境とは全く異なり、不安や緊張に満ちた環境である。そこで、幼児が安心して主体的に環境に関わるために、保育者の存在は欠くことができない。上垣内(2003)は保育者のよりどころとしての役割の重要性について「幼稚園に入園することは、子どもにとって新しい時空に一人で踏み出すことである。この時期の保育者の大切な援助は、「することの前提に「居る」ことを保証することである」と述べている。つまり、子どもが集団生活に主体的に参加していくということは、活動に取り組む前提として、園の中で信頼を寄せる存在を獲得し、その存在を核として、安心感を得て、その上で自分らしさを発揮して動き始めることができるのである。

このように、保育者が人的環境として保育の中で担う役割は、極めて重要であることは明らかである。これまでの先行研究においても、この保育者の役割については様々な視点から論じられてきた。

砥上(2015)、高野(2014)は、保育者の役割として、保護者支援や子育て支援に焦点をあて、保育者の保護者支援で抱えている課題や現状を明らかにし、その専門性のあり方を検討している。また、保育者の幼児の共同作業・共鳴者としての役割については、保育者が子どもとの共感や信頼関係をどのように捉えているか検討したもの(岡本, 2015)や保育者の共感的まなざしと子どもの集団参加との関連を扱ったものがみられる(橋川, 2016)。さらに、幼児の活動の理解者としての役割に関する先行研究では、「幼児理解」や「子ども理解」という用語で、保育者がどのように子ども姿や行為を捉えているか、その方略やプロセスを検討しているものが多数みられる(文部科学省, 2002; 小山, 2006; 岡田・中坪, 2008; 蘇・香曾我部・三浦・秋田, 2009, 中島, 2014; 平澤, 2015; 小藪江, 2016)。

このように従前の先行研究においても、保育者の役割については幅広く論考されているが、いずれも幼稚園教育要領に列挙されている役割の一つに焦点をあて、単一の視点から検討しているものが殆どであった。現在まで、保育者の役割として、幼稚園教育要領等で示されている事項を包括的に検討した先行研究は見当たらない。保育者の専門性の確立、資質向上が求められる中、保育者の人的環境としての役割を総合的に検討する意義は大きいと考える。また、実践の保育者自身が保育者の役割をどのように捉え、重要視している事柄は何か、保育者自身の意識に焦点を当て検討したものもみられない。そこで、本研究では保育者自身が保育者の役割として、『幼稚園教育要領解説』(文部科学省, 2008)で示されている4点

(子どもの理解者、子どもとの共同作業・共鳴者、憧れを形成するモデル、子どもの精神的よりどころ)の中で、どの役割を重要だと考えているか検討していきたい。さらに、保育者自身が保育者の役割として大切だと思われる事柄の自由記述の回答から分析し、『幼稚園教育要解説』(文部科学省, 2008)で示されている4点の役割を現職保育者がどのように捉えているか各点について検討することを目的とする。

II 方法

1. 調査協力者

首都圏の保育所、認定こども園に勤務する現職保育者70名を対象とした。回答者は、55名であり、回答率は78.6%であった。

2. 調査期間

2016年7月～8月

3. 調査方法

無記名による質問紙調査を行った。各園の園長に調査協力を依頼し、承諾が得られた園に、筆者が直接出向き、調査用紙を配布した。回収は、各園の園長に依頼し、後日郵送により回収する留置調査を行った。

4. 倫理的配慮

回答は任意とし、無記名での記載を依頼した。質問紙の表紙に、調査目的に加え、調査協力者への個人情報取り扱い等、調査倫理に関する注意事項を明記した。また、調査協力者による同意は、質問紙への記入をもって同意を得たものとした。

5. 調査内容

- (1) フェイスシートの項目(性別、年代、就労先、管轄、職名、保育経験年数、現在の担当年齢)について回答を求めた。
- (2) 保育者自身が『幼稚園教育要領解説』(文部科学省, 2008)で示されている保育者の人的環境としての役割4点(子どもの理解者、子どもとの共同作業・共鳴者、憧れを形成するモデル、子どもの精神的よりどころ)の中で、重要だと考えるものを1から4位まで優先順位をつけるよう求めた。
- (3) 保育者自身が人的環境としての保育者の役割として大切だと思われる事柄について、思いつく限り自由記述式による回答を求めた。

6. 分析方法

回答された自由記述に対し内容分析を行った。質問に対して回答された自由記述のデータを対象とし、それぞれのデータを意味的なまとまりよるユニットに分け、KJ法(川喜多, 1967)より援用した手法でカテゴリに分類し、各カテゴリに表札をつけた。表札は、大グループは【 】、小グループを[]で示した。ユニットの分類に際しては、筆者を含めた2名の評定者によって行われ、分類の一致率は、 $k = .83$ であった。分類の一致しなかったユニットについては、協議の上分類を決定した。

III 結果

1. 調査協力者の概要

調査協力者の概要は以下の通りである。保育者55名のうち、女性48名、男性7名であった。

調査回答者の年代別の割合は、20代が22名(40%)、30代が7名(12.7%)、40代が11名(20%)、50代が15名(27.3%)であった。

現在の就労先については、保育所が33名(60%)、こども園が22名(40%)であり、就労先の管轄は、公立が28名(50.9%)、私立が27名(49.1%)であった。

職名については、園長が2名(3.6%)、副園長/教頭が1名(1.8%)、主任が3名(5.5%)、保育士/教諭が48名(87.3)、その他が1名(1.8%)であった。

経験年数については、0年～37年の範囲で、平均保育経験年数は、14.0年(標準偏差13.1)であった。

現在の担当年齢は、0歳児が7名(12.7%)、1歳児が10名(18.2%)、2歳児が8名(14.5%)、3歳児が9名(16.4%)、4歳児が6名(10.9%)、5歳児が6名(10.9%)、その他が6名(10.9%)、未記入3名(5.5%)であった。

2. 保育者の人的環境としての役割の中で、重要視する事柄

はじめに、保育者の人的環境としての役割として、『幼稚園教育要領解説』(文部科学省, 2008)で示される4点(子どもの理解者、子どもとの共同作業・共鳴者、憧れを形成するモデル、子どもの精神的よりどころ)の中で、どの役割を保育者自身が重要だと考えているか1位から4位まで優先順位をつけ検討を行った(Table 1)。その結果、保育者自身が、人的環境としての保育者の役割として、最も重要だと考えている事柄は、子どもの精神的よりどころであり、回答者の約半数が重要だと捉えていた。次に保育者が重要視している役割は、子どもの理解者であった。そして、3番目が子どもとの共同作業・共鳴者としての役割であり、最下位が憧れを形成するモデルという順であった。上位3点がいずれも子どもの心

Table 1 保育者自身が捉える保育者の役割として重要視する事柄

	1位	2位	3位	4位
子どもの精神的よりどころ	28 (50.9)	14 (25.5)	11 (20)	1 (1.8)
子どもの理解者	25 (45.5)	28 (50.9)	2 (3.6)	0
子どもとの共同作業・共鳴者	2 (3.6)	11 (20)	34 (61.8)	7 (12.7)
憧れを形成するモデル	0	1 (1.8)	7 (12.7)	47 (85.5)
未記入	0	1 (1.8)	1 (1.8)	0
計	55	55	55	55

数値は人数。() は%

情や内面にかかわる事項であり、保育者自身は、人的環境としての保育者の役割の中で、子どもの内面や精神的部分を重視しているということが示された。

3. 保育者の人的環境としての役割について(自由記述の結果から)

次に、保育者自身が保育者の役割の中でどのような事柄を重要だと考えているか検討するため、保育者の役割として大切だと思う事柄に対する自由記述の回答から分析を行った。以下に自由記述の分類結果を示す。

まず、保育者の役割として大切だと思われる事柄に対する自由記述の回答から、先に示した分析の手順により、キーワードを抽出し分類を行った。その結果、計114枚のラベルが抽出された。次にラベルの内容が類似したものを整理して、グループごとに分類した結果、以下に示す4つの大グループ【 】と16の小グループ[]に分類された(Table 2)。

初めに、保育者自身が捉える人的環境としての保育者の役割の中で最も多い言及は、【子どもの精神的な部分にかかわる役割】であった。このグループは、[子どものよりどころ][子どもの受容者]、[子どもの理解者]、[子どもの共鳴者・共感者]、[子どもとの信頼関係]、[子どもの自己肯定感]の6つの小グループから構成され、子どもの精神的な部分や心情に対する保育者の役割についての記述である。

これらの小グループの分類の中でも保育者が最も重要だと捉えている役割は、[子どものよりどころ]であった。このグループは、子どもにとって安心して寄り添えること、安定の基盤としての存在というように子どもが安心して園生活を送れるための精神的支えについての言及である。次に多い分類の役割は、[子どもの受容者]である。このグループは、子どもの気持ちを受け止め、受容するという記述で、子どもの存在や心情のあるがままを受け容れることに関する役割である。3番目に多い記述は、[子どもの理解者]としての役割である。子どもの良き理解者になってあげる、子どもの気持ちを理解する

ようにするのように、子どもの行為や内面に対する理解についての言及である。[子どもの共鳴者・共感者]は、子どもの気持ちに共感する、子どもの発言や行動に寄り添う等、子どもの心情や行為を共有し、同調することのグループである。そして、[子どもとの信頼関係]では、保育者と子どもとの間で信頼関係を築いていくことに関する記述である。最後に[子どもの自己肯定感]は、子どもが自己肯定感をもてるようにするというように、子どもが園生活の中で自分自身の存在を肯定できるようにしていく事に対する言及である。

2番目に大グループの中で言及の多かったグループは、【子どもの成長や援助にかかわる役割】に関する記述であった。このグループは、子どもが成長することに対する援助や子どもが社会生活を送る上で身に付くことが望ましいとされる、意欲や態度、基本的な生活習慣等にかかわる記述である。小グループとしては、[子どもの成長への援助]、[子どもの興味や意欲を育む]、[社会の中での基本的事項やルール、規範を伝える]、[環境を整える]の4つに分類された。

このグループの中で、最も言及が多かった小グループは、[子どもの成長への援助]であった。これは、子どもが心身ともに健やかに成長していくための援助に関する言及であり、一人一人の心身の成長を受け止め、よりよく伸ばすこと等が記述例である。次に記述が多かった小グループは、[子どもの興味や意欲を育む]で、色々なことに興味を示し、意欲を持てるようにしていくことのように、子どもが園生活で興味や関心、意欲を培えるようにする事に対する言及である。3番目に多い小グループは、[社会の中での基本事項やルール、規範を伝える]である。このグループは、子どもが今後社会生活の中で、必要とされる基本的な事柄(挨拶、物事の善悪、規範等)を伝達することに関する言及をさす。例えば、遊びや生活を通して、決まりや大切なことを伝える、挨拶等、基本的な社会的ルールについて等である。[環境を整える]グループは、園生活の中で子どもが様々な環境に関わり、経験を重ねられるよう、保育者として様々なきっかけを

Table 2 保育者自身が捉える保育者の役割として大切な事柄

保育者の役割の分類 (大グループ)	件数	小グループ	記述例	件数
【子どもの精神的な部分にかかわる役割】	54 (47.4)	[子どものよりどころ]	子どもにとって安心して寄り添えること 安定の基盤としての存在	17
		[子どもの受容者]	子どもの気持ちを受け止め、受容する 受容する心	12
		[子どもの理解者]	子どもの良き理解者になってあげる 子どもの理解に努める	9
		[子どもの共鳴者・共感者]	子どもの思いに寄り添う 子どもの気持ちに共感する	8
		[子どもとの信頼関係]	信頼できる存在 子どもとの信頼関係	6
		[子どもの自己肯定感]	子どもが自己肯定感をもてるようにする 自己肯定感を感じられるようにすること	3
【子どもの成長や援助にかかわる役割】	29 (25.4)	[子どもの成長への援助]	一人一人の心身の成長を受け止め、よりよく伸ばすこと 発達に合わせた働きかけを行う 子ども一人一人の発達や成長に合わせた援助をしていくこと	11
		[子どもの興味や意欲を育む]	色々なことに興味を示し、意欲を持てるようにしていくこと 一緒に遊びを楽しむ姿を見せたり、共感する中で、興味、関心、意欲を育む	6
		[社会の中での基本的な事柄やルール、規範を伝える]	挨拶等、基本的な社会的ルールについて 良し悪しを伝えること 遊びや生活を通して、決まりや大切なことを伝えること	8
		[環境を整える]	様々なきっかけをつくる 新しい経験のきっかけづくり	4
【保育者の資質や姿勢にかかわる役割】	17 (14.9)	[子どもの手本・モデル]	お手本や見本となるような言動 身だしなみや振る舞い	5
		[研鑽を重ねる]	常に努力をすること 幅広い着眼点、理解度の広さ	4
		[子どもの仲立ち・代弁者]	子どもの気持ちを汲み取り、代弁していく やり取りを通して関わり方を知ることができ るよう仲介していくこと	4
		[人間としての関わり]	一人の人間として子どもと関わる 人と人との関わり	4
【保育者、保護者との連携にかかわる役割】	14 (12.3)	[保育者同士の連携]	保育者間の共通認識が大切 保育者が連携をとり一つの目的に向かってい くこと	8
		[保護者との連携]	保護者のサポート 保護者が安心して預けられるようにコミュニ ケーションをとること	6
計	114			114

()内は% は、『幼稚園教育要領解説』で示されている役割と同様の記述結果

つくる、新しい経験のきっかけをつくることに対する役割についての言及である。

3番目に保育者の役割として多い大グループは、【保育者の資質や姿勢にかかわる役割】であった。このグループは、保育者自身の子どもに対する姿勢や資質に関する記述である。小グループとして、[子どもの手本、モデル]、[研鑽を重ねる]、[子どもの仲立ち、代弁者]、[人間としての関わり]の4つがあげられた。

このグループで言及数が最も多い小グループは、[子どもの手本・モデル]である。このグループは、保育者自身が人的環境として子どもの見本や手本となる事に対する記述である。お手本や見本となるような言動、身だしなみや振る舞いという言及である。この小グループは、『幼稚園教育要領解説』で示されている保育者の役割のうちの1つである憧れを形成するモデルと同様の記述結果だった。次に言及が多い小グループは、[研鑽を重ねる]であった。これは、常に努力することのように、保育者自身が子どもの成長に携わる大人として、修練を継続する事に対する言及である。そして、[子どもの仲立ち・代弁者]グループは、子ども同士や他者との人間関係の構築のため、仲立ちや代弁をするという役割についての記述である。最後に、[人間としての関わり]は、保育者と子どもという立場ではなく人間としての関わりが保育者としての役割で重要であると考えている言及である。一人の人間として子どもと関わる、人と人との関わり等が記述例である。

4番目の大グループは、【保育者、保護者との連携にかかわる役割】であり、小グループとして[保育者同士の連携]、[保護者との連携]の2つに分類された。このグループは、子どもにとって重要な人的環境である保護者と保育者についての言及であり、保育者同士、保育者と保護者との連携を保育者の役割として重要視している記述である。小グループの[保育者同士の連携]は、保育者間の共通認識が大切、保育者が連携をとり一つの目的に向かっていくことが記述例としてあげられた。また、[保護者との連携]では、保護者が安心して預けられるようにコミュニケーションをとること等が記述例としてみられた。

以上のように、保育者自身が捉える保育者の役割として大切だと考えている事柄を自由記述の回答から分類した結果、これまで『幼稚園教育要領解説』で示されていた保育者の4つの役割が全て包括されていた。さらに保育者自身が捉える保育者の役割として、12項目が抽出された。また、現職保育者は、人的環境としての保育者の役割の中で、【子どもの精神的部分にかかわる役割】を最も重要な役割として捉えていることが明らかになった。

IV 考察

本研究では、現職保育者が、人的環境としての保育者の役割をどのように捉えているか検討するため、第1に『幼稚園教育要領解説』で示されている4点(子どもの理解者、子どもの共同作業・共鳴者、憧れを形成するモデル、子どもの精神的よりどころ)の役割の中で、どの役割が重要だと考えるか、第2に保育者の役割として大切だと思われる事柄について、自由記述による回答から分析を行い、第3に保育者自身が上記の役割の4点をどのように捉えているか各点について検討を行った。以下に、分析結果をもとに上記の3点について考察を述べる。

第1に、保育者自身が重要視している役割の優先事項についてである。現職の保育者が保育者の役割として重要視している事柄はどのような点か検討するため、『幼稚園教育要領解説』(文部科学省、2008)で示されている4点の役割について、優先順位の回答から分析を行った。そこでは、最も重要だと考えている役割は、子どもの精神的よりどころであった。2番目は、子どもの理解者としての役割であり、次いで子どもの共同作業・共鳴者の役割と続き、最後は、子どもの憧れを形成するモデルであった。今回の結果では、上位3点が子どもの心情や内面に対する保育者の役割があげられ、現職保育者が人的環境としての役割の中で、子どもの精神的部分に対する関わりや援助を重視していることが示された。現職保育者の中で、子どもの成長が、園内の環境との主体的な関わりを通して行われていくという認識は、共有されている。しかし、現職保育者は、子ども一人ひとりがこの主体的な環境へ関わる前提として、保育者の温かい受容や安心感の獲得が必須と考え、子どもの心情に対する役割を優先事項として挙げていることが推察される。

第2に自由記述の回答からの保育者の人的環境としての役割についてである。また、現職保育者が人的環境としての役割の中でどのような事柄を大切だと考えているか、自由記述による回答から分析を行った。さらに、その自由記述の分析結果と先述の4つの保育者の役割を現職保育者がどのように捉えているか検討した。

まず自由記述の分析からの保育者の役割として重要であると考えられる役割では、【子どもの精神的な部分にかかわる役割】、【子どもの成長や援助にかかわる役割】、【保育者の資質や姿勢にかかわる役割】、【保育者、保護者との連携にかかわる役割】の4つの大グループに記述が分類された。この中で、保育者が最も大切であると考えられる役割は、【子どもの精神的な部分にかかわる役割】という結果であった。これは、上記の『幼稚園教育要領解説』で示された4つの役割の中で、現職保育者が重要であると考えられる優先事項の中で首位の項目と同様であった。現職

保育者は、保育の営みの中で計画を作成し、子どもの発達に即した活動を展開していくことも重要な役割であると認識しているが、それ以上に子どもが園生活の中で自己を十分発揮できるよう、情緒の安定や安心等子どもの精神的部分への援助を最優先事項と捉えていることが示された。

次に、【子どもの精神的な部分にかかわる役割】の小グループの項目についてである。この分類の小グループは、6つのグループから構成されていた。その中で、最も記述数が多い項目が、[子どものよりどころ]であった。この項目は、保育者が子どもの安定の基盤としての役割が重要であるとしているグループである。次は、[子どもの受容者]としてのグループであり、子どもの思いや要求を受容する事が大切であると考えている記述である。さらに、[子どもの理解者]、[子どもの共鳴者・共感者]、[子どもの信頼関係]、[子どもの自己肯定感]という言及数の順であった。今回の結果では、これまで『幼稚園教育要領解説』で示されていた4つの役割のうち、[子どものよりどころ]、[子どもの理解者]、[子どもの共鳴者・共感者]の3点が自由記述の分類において同様の項目として抽出された。

保育は、「一人一人の幼児が教師や多くの幼児たちとのかかわり、発達に必要な経験を自ら得ていけるよう援助する営み」(文部科学省, 2010)であり、この援助を担う保育者は、一人一人の子どもが発達を着実に促すため、園内において第一に、幼児の様々な心情をあるがままに受容し、理解者として実践の中に身をおくことを重要視しているのだろう。これらの結果は、上垣内(2003)が記している「入園したばかりの子どもは、何かを「すること」の前提に「居る」ことが保証されることが重要である」という指摘と同様であった。保育者は、まず園生活を送る子どもに対し、一人一人の子どもが園内で安心、安定の基盤が築けるような援助をしていく役割を優先事項として考えているのだろう。子どもが園生活で自己発揮していくためには、その空間や対象が相手との間に基本的信頼関係を築いていくことが重要であり、園生活ではその対象は担任保育者ということになる。したがって、保育者の人的環境の役割として、[子どものよりどころ]や「子どもとの信頼関係」、[子どもの理解者]のような子どもの精神的部分に対する援助が優先されるという結果につながったのだと考える。

続いて2番目に多い大グループは【子どもの成長や援助にかかわる役割】であり、小グループとして【子どもの成長への援助】、【子どもの興味や意欲を育む】、【社会の中での基本的事項やルール、規範を伝える】、【環境を整える】の4つがあげられた。これらの記述結果から、保育者は上述した子どもの情緒の安定や信頼関係を基盤

とし、その上で次の段階として、子どもがより園生活の中で充実した日々を過ごし、一人一人の子どもの心身の成長を保証すべく、興味や意欲を育み、社会的な基本事項を伝える役割を重要であると捉えていると考える。

その次に記述の多い大グループは、保育者自身の保育に対する姿勢や資質にかかわる【保育者の資質や姿勢に関する事柄】であった。保育者は、人的環境として子どもたちに大きな影響を与える存在である。したがって、保育者自身もその点を十分認識し、[子どもの手本、モデル]、[研鑽を重ねる]、[子どもの仲立ち、代弁者]、[人間としての関わり]というグループの抽出につながったのだと考える。保育者は仮に、同じ教育、同じ経験を重ねてきたとしても、その経験をどのように受け入れるか、どのように認識しているかは、一人一人の保育者によって異なる。したがって、保育者は、常に自分自身の保育を見つめなおし、一人の人間としての資質や姿勢を向上していくことが重要であろう。

大グループの最後に分類されたのは、【保育者、保護者との連携に関する事柄】であった。現在、保育を担う各施設において、社会環境の変化の中、養育力の低下、ひとり親家庭の増加等、子どもだけでなく保護者をはじめとする子育て家庭への支援が求められている。その点でも、保育者自身がチーム保育という観点から園全体の教職員間の連携や家庭との連携が子どもの育ちには不可欠であるという認識により、このグループに対する言及がみられたのだと予測する。

第3は、現職保育者が捉える保育者の役割と『幼稚園教育要領解説』で示されている保育者の役割との差異についてである。現職保育者が保育者の役割をどのように捉えているか検討するため、『幼稚園教育要領解説』に記されている4つの役割と自由記述の分類結果から分析を行った。その結果、これまで保育者の役割として示された『幼稚園教育要領解説』の4つの役割(子どもの理解者、子どもの共同作業・共鳴者、憧れを形成するモデル、子どもの精神的よりどころ)が、現職保育者自身が捉える人的環境としての保育者の役割として分類された12項目の中に4点全てが同定されるという結果であった。したがって、本研究で明らかになった保育者自身が捉える役割は、『幼稚園教育要領解説』の4つの役割を含む包括的なものであるといえよう。

以上本研究では、保育者自身が人的環境としての役割をどのように捉えているか、またどの役割が大切であると考えているか検討した。そこでは、保育者自身が保育者の役割の中で最も重要視している事柄は、子どもの心情や精神的部分にかかわる援助やかかわりの役割であるということが明らかになった。さらに、保育者自身が捉える人的環境としての保育者の役割として、12項目の役

割が小グループとして見出された。この12項目の役割の中には、これまで『幼稚園教育要領解説』で示されていた4つの役割(子どもの理解者、子どもの共同作業・共鳴者、憧れを形成するモデル、子どもの精神的よりどころ)が全て同定されるという結果であり、保育者自身も左記の4点の役割を重要であるという認識を持っているのであろう。

最後に本研究の今後の課題について述べる。1点目は、保育者の経験年数による影響についてである。今回の調査協力者の保育者は、経験年数の幅が1年目から37年目と分布の幅が大きかった。保育者の役割として大切だと考える事柄について、経験年数という変数による回答への影響が考えられるので、今後経験年数による差異についても検討する必要がある。さらに、幼稚園、保育所、認定こども園等保育施設別に保育者の役割の捉えの違いについても併せて検討していきたい。

謝辞

本研究の実施にあたり、快く調査にご協力いただきました、多くの保育所、認定こども園の先生の皆様には、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 橋川喜美代(2016). 保育者の共感と子どもの集団への参加過程—ラーニング・ストーリーが描き出す子どもの終段参加への分析—
- 平澤順子(2015). 保育者の「遊びの捉え方」と援助の問い直し—子どもの遊びにおける内面の読み取りに焦点を当てて—日本女子大学大学院紀要, 21, 113-121.
- 岩立京子・樟本千里・福田真奈(1998). 幼稚園教諭および保育所保育士のキャリア形成(1)—保育者の保育実践における経験内容およびその経験年数による差について—東京学芸大学紀要, 49, 215-220.
- 上垣内伸子(2003). 心の拠り所と保育者の役割 発達, 24(96), 25-28.
- 川喜多二郎(1967). 発想法. 中公新書.
- 厚生労働省(2008). 保育士の専門性 厚生労働省 保育所保育指針解説 フレーベル館 pp. 19-20.
- 小山洋子(2006). 幼児理解と保育者の援理解を深める 保育記録に関する研究(1)—保育記録の原理・方法から再考する—北陸学院短期大学紀要, 38, 99-113.
- 文部科学省(2002). 幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために(報告)〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm〉
- 文部科学省(2008). 教師の役割 文部科学省 幼稚園教育要領解説 フレーベル館 pp. 214-215.
- 文部科学省(2010). 幼児理解と評価の基本 幼児理解と評価

文部科学省 pp. 8.

- 文部科学省中央教育審議会(2016). これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上にういて～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(平成27年12月21日答申). 〈http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf〉
- 内閣府(2015). 園児の主体性と保育教諭等の意図 教育・保育要領解説 フレーベル館 pp. 40.
- 中島紀子(1999). 保育現場における子ども理解の方法論について(I)—保育臨床の視点より— 聖カタリナ女子短期大学紀要, 32, 45-56.
- 岡本かおり(2015). 保育者のとらえる子どもとの信頼感 学習学研究, 8, 185-194.
- 岡田たつみ・中坪史典(2008). 幼児理解のプロセス—同僚保育者がもたらす情報に着目して— 保育学研究, 46(2), 33-42.
- 小藪江幸子(2015). 「保育者の見守り行動」についての検討—生きる力の基礎を培う“見守り行動”を探る— 淑徳大学短期大学部研究紀要, 55, 2016.
- 蘇 珍伊・香曾我部琢・三浦正子・秋田房子(2009). 保育・幼児教育現場における保育者の子ども理解の視点と研修ニーズ—園長・主任と一般保育士・教諭の比較を中心に—現代教育学研究紀要, 2, 105-111.
- 諏訪 きぬ(2004). 人的環境としての保育者(総説) 保育学研究, 42(1), 8-11.
- 高野亜紀子(2014). 保護者支援から見る子どもを取り巻く環境の今日的課題 東北福祉大学研究紀要, 38, 33-46.
- 砥上あゆみ(2015). 保育者の専門性と子育て支援の役割 純真紀要, 55, 95-102.